

第3章 考 察

第1節 宮崎城跡の縄張について

(1) 宮崎城跡の縄張研究

宮崎城跡の縄張図については、1987年の『図説中世城郭事典』における八巻孝夫氏作成のものが最初である（八巻1987）（9頁第6図）。その後、宮崎市教育委員会の依頼により千田嘉博氏が縄張図を作成し、2004年の同氏による論考（千田2004）および2009年の『宮崎城跡測量調査報告書』に掲載された（千田2009）（第42図）。さらに八巻孝夫氏は再調査に基づく新知見を加えて、2013年に縄張図第2版を発表した（八巻2013）（第43図）。宮崎城跡に関する今日現在の研究状況について最も特筆すべきは、この両氏それぞれの手になる縄張図が存在することであろう。

以下では両氏の調査・研究成果をもとに、宮崎城跡の構造について確認と若干の検討を試みる。ただし、その主軸となる両氏それぞれの縄張図においては、当然ながら各曲輪に付されたナンバリングが異なる。言うまでもなく、曲輪No.は多大な苦労とともに縄張図の作成にあたった研究者の、その城跡に対する分析と解釈を表現するための重要な一要素であり、引用にあたってはこれを尊重すべきである。ただし本節は異なる研究者それぞれの縄張図を用いて、宮崎城跡の構造についての理解を深めるという目的を持つ。ゆえに対象となる曲輪を共通の番号で表現した方が、文意が通り易いと思われる。以下では記述上の便を図るため、2009年に宮崎市教育委員会が発行した『宮崎城跡測量調査報告書』（宮崎市教委編前掲同）掲載の千田嘉博氏作成の縄張図による曲輪No.を共通して用いたい。これと異なる論考で付された番号は「(原著曲輪○)」として記す。

また特に断りのない限り、千田氏の見解は2004年の上記論考およびこれに共通した2009年の『宮崎城跡測量調査報告書』掲載のもの（千田2004および2009）により、八巻氏の見解は第2版である2013年の論考（八巻2013）による。

(2) 宮崎城跡の曲輪

宮崎城跡は標高90m（麓からの比高差70m）前後の、大きくは南北に長く伸びる尾根上において、千田氏の縄張図では10の、八巻氏の縄張図では16の曲輪が構築されている。以下、主要部を中心として各曲輪の構造を確認する。

曲輪Ⅰ（主郭） 曲輪Ⅰは標高約91.5m、曲輪面の規模は東西92m、南北78m、面積約3,600㎡である。現況では内部に堀や溝、段差等による区画の認められない単郭の曲輪で、南東には曲輪内から横矢を掛けるスロープ状の虎口が設けられる。昭和50年前後に送電鉄塔が曲輪北端に建設され、その下に位置する北側斜面に瓦片が散布する。

現況、曲輪ⅠとⅢの間の堀切東端から曲輪Ⅰの北側斜面をつづら折りに登って曲輪内に至るルートがあるが、千田、八巻両氏ともに城郭当時のものの可能性は低いとしている。千田氏は曲輪Ⅰを挟んで位置する曲輪Ⅱ・Ⅲ間の連絡には、曲輪Ⅰの裾を巡るルートが存在したはずと予察しているが、八巻氏は曲輪Ⅰ（原著曲輪1）東側斜面の腰曲輪が本来の道ではないかと指摘している。現在、この腰曲輪は途中で崩落しているため道筋を辿ることができないが、字図では該当部分が細長く伸びる道状となり、曲輪南東の虎口に接続している（第44図）。八巻氏指摘のこのルートが曲輪Ⅰ・Ⅲ間堀切から曲輪Ⅰに進入する、また曲輪Ⅰを挟んで位置する曲輪Ⅱ・Ⅲ間の連絡に用いられた本来の城道であ



第 42 図 千田嘉博氏作成の宮崎城跡縄張図
※宮崎市教委編 2009 より転載



第43図 八巻孝夫氏作成の宮崎城跡縄張図(第2版)
※八巻2013より転載

る可能性が高い。

1987 年の『図説中世城郭事典』において八巻氏は、大規模な堀切で外界から隔絶された曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ（原著曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）を主郭グループとし、その中でも横矢掛りの虎口を持つ曲輪Ⅰ（原著曲輪Ⅰ）が曲輪間の関係で最も上位にあると分析してこれを主郭と位置付けた（八巻 1987）。千田氏は曲輪群の中央に位置すること、他に等高の曲輪があるものの城内中の高所を占めること、内部を分割した形跡のない単郭の広い曲輪であることから、同じく曲輪Ⅰを主郭としている。さらに八巻氏は 2013 年の論考においても、南に位置する曲輪Ⅱ（原著曲輪 9・10）との間の空堀に曲輪Ⅰ（原著曲輪 1）から横矢を効かせ、また共通の登城路からアクセスする北の曲輪Ⅲ（原著曲輪 2）とは導線がより複雑で防御に堅い曲輪Ⅰの方が上位であることから、やはり曲輪Ⅰを主郭とする。



第 44 図 曲輪Ⅰ周辺の字図

※アミが道状の部分

曲輪Ⅰ＝主郭は、戦国期末の『上井覚兼日記』に記された宮崎城の「内城」に比定される。織豊期における高橋氏の城代権藤種盛時の曲輪名を記したと思われる「直純寺由緒書」（瓜生野・倉岡郷土誌編委編 1986）では、規模が整合することから記述中の「本丸」に比定され、同じく直純寺の「宮崎城見取図」（富永 1978）（8 頁第 4 図）でも「本丸」とされる。また明治期の『日向地誌』（野口 1976）では「本城ヲ椎城ト云」と、別の伝承名も記されている。現在、地元でも本丸と伝承されている。なお各曲輪に対する「〇〇城」という呼称は、中世以来、南九州の城郭で広く認められる。

千田氏は『上井覚兼日記』より主郭における御殿、会所空間、庭園、茶室、風呂、毘沙門堂の存在と、城主（覚兼）に直属した職人の工房も併設されていた可能性を指摘している。

曲輪Ⅱ（百貫城） 曲輪Ⅱは間に堀切を置いて曲輪Ⅰ（主郭）の南東に位置しており、最高点の標高 92.5



写真 1 曲輪Ⅰ現況 ※中央は地元有志による「本丸城跡」標柱

m、曲輪面の規模は東西 116 m、南北 91 mで、面積は約 8,000 m²にもなる。内部は堀、溝、段差によって複数の区画が作り出され、千田氏は曲輪Ⅱ a～d と 4 つに細分し、八巻氏は中央部に通路（空堀道）を入れて東西に分割された大きくは 2 つの曲輪としている（原著曲輪 9・10）。曲輪Ⅱ 南側の墨線やや西寄りには曲輪外に張り出した土塁をとまなう外枳形を志向した虎口（後述の和田口）が設けられるが、北西側の曲輪Ⅰと連絡する地点には土塁等の施設が認められず、先述の八巻氏の指摘通り、明確に曲輪間の上下関係が表出されている。現況、曲輪Ⅱ a とⅡ b～d を東西に分ける堀の間には土橋が認められるが、千田氏、八巻氏ともに往時からのものかどうか不明としている。また曲輪の東端（曲輪Ⅱ b 南東端）には送電鉄塔が建設されている。

曲輪Ⅱの機能について、千田氏は内部を細かく区画した屋敷地としている。「直純寺由緒書」の「南城（南之城）」に比定され、「宮崎城見取図」では「百貫ショウジ」とされる。現在の地元における伝承名は「百貫城」である。「百貫ショウジ」の伝承名について八巻氏は「本城を敵から守る重要な曲輪という意かもしれない」と考察している。

また曲輪Ⅱの東側には長大な堀切を隔てて南北に細長く伸びる曲輪Ⅳがある。さらにそこから続く南東の尾根には横堀が入り、その対岸の尾根上には土塁ないし段が設けられている。この曲輪Ⅳについて千田氏は、曲輪Ⅱに比べて面の削平がやや甘く、防御機能に主眼をおいた曲輪とする。これに沿えば曲輪Ⅱ以内を防御するための機能に重点を置いた曲輪ということになる。ここを「宮崎城見取図」では「猿渡一馬乗馬場」とする。

曲輪Ⅲ（野首城） 曲輪Ⅰ（主郭）とは間を大型の堀切で隔てた北西に位置し、最高点標高 92.8 m、曲輪の規模は東西 159 m、南北 119 m、面積 9,700 m²で、曲輪Ⅰを挟んで南に位置する先述の曲輪Ⅱ（百貫城）よりも更に広い面積を持つ。曲輪Ⅱと同じく溝、段差で曲輪内部が区画され、千田氏はⅢ a～e と 5 つに細分し、八巻氏は 3 つの区画を図示している（原著曲輪 2）。

曲輪の南側では曲輪Ⅰと共有する堀切から 2 段の帯曲輪を経て曲輪内に入るが、この進入地点は方形に近い形で窪んでおり、八巻氏は枳形と評価する。また反対側の曲輪北東端も方形に近く窪んでおり、ここから曲輪斜面を回り込むスロープを経て北側の丘陵鞍部に降りる。この方形部分を千田氏は「定型化したものではないが内枳形」、八巻氏も枳形とする。くわえて千田氏は、中心曲輪群への南北双方の出入口として、曲輪Ⅱ南側の虎口が外枳形であるのと対になって、北側のこの虎口が内枳形の形態をとっていると評価している。また八巻氏はこの虎口周辺を地元では「ビシャモン」と呼んでいることを紹介している。

曲輪Ⅲは派生する東西それぞれの尾根上における防御上の造作が特徴的で、曲輪直下にあたる西側尾根の基部には長大な横堀と、その対岸に土塁を設ける。また東側尾根は大規模な堀切で切り離され、その対岸に狭小な曲輪が設けられている。千田氏はこれを櫓台と推測し、また現況ここに認められる窪みについて穴蔵状施設の痕跡であった可能性を指摘している。同じくこの窪みについて八巻氏は、登城路を見下ろす重要な地点であることから、城内側の兵がこれを押さえるための塹壕状の施設ではないかと推測している。

曲輪Ⅲ内部の区画について千田氏、八巻氏ともにこれを屋敷割と評価している。「直純寺由緒書」中の「野首之城代・・・」の記述がこの曲輪に比定され、「宮崎城見取図」でも「野首城」とされる。地元における同所の伝承名には、「野首城」にくわえて「目引城・目曳城」があるが、これは宮崎城



写真2 曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切現況 ※東より撮影

められ、曲輪虎口と思われる。現況、この東側塁線に沿って城麓に通じる道が設けられているが、八巻氏は新道としている。曲輪南端は3段の段差をもって高くなり、城内最大の堀切に面しているが、千田氏、八巻氏ともにその最上段を櫓台と評価している。

「直純寺由緒書」中では記載されたその規模から「小城」に比定されるが、同書中ではその城代を曲輪Ⅰ（主郭）・曲輪Ⅱを隔てた曲輪Ⅲ（野首城）と「同人」としており、やや違和感がある。「宮崎城見取図」では「彦右衛門城」と記され、『日向地誌』記載の「彦右衛門城」にあたる。

曲輪Ⅷ（服部城） 曲輪Ⅲ（野首城）北東の虎口から曲輪斜面を回り込むスロープを経て北側に降りると、八巻氏が曲輪3とする一定面積を持った丘陵鞍部に至る。曲輪Ⅷはここからさらに北側に位置する、大きくは3段に分かれた曲輪である。規模は東西38m、南北42m、面積870㎡と小型の曲輪で、最上段の標高は91.7mである。この曲輪は東西それぞれに尾根が伸びる基点にあり、八巻氏は北の防御の要とする。曲輪Ⅷの北東側には二重の堀切が入り、その先は細長く東に約1160m延びる長大な曲輪Ⅸ（八巻氏の曲輪5）となる。その東端からさらに北と東に細い尾根が延びるが、それぞれ削平段と堀切で区切ってあり、曲輪Ⅸが城域北東端となる。曲輪Ⅷの北西端には土塁状の高まりがあり、千田氏、八巻氏ともに櫓台の可能性を指摘する。その先は大型の堀切となり、対岸に狭小な曲輪Ⅹ（八巻氏の曲輪6）を設け、その先は4段ほどの段が入ったのち堀切となり、曲輪Ⅹが城域北西端となる。

曲輪Ⅷは「直純寺由緒書」、「宮崎城見取図」とともに該当する記載がないが、地元では『日向地誌』記載の「服部城」を同所の伝承名としている。曲輪Ⅸは「宮崎城見取図」で「射場城」とされ、『日向地誌』記載の「弓

全体の別名としても言い伝えられるものである。

曲輪Ⅴ（彦右衛門城） 曲輪Ⅱ（百貫城）と堀切を隔てた南側に位置し、標高85.6m、曲輪面の規模は東西28m、南北85m、面積1,800㎡で南北に長い平面形の曲輪である。曲輪北側には堀切に面して土塁が設けられ、八巻氏はこの堀切に入った敵への攻撃と防御を兼ねたものとする。この土塁に接して、曲輪東側塁線上の北端には方形に下がった段が明瞭に認



写真3 曲輪Ⅷ現況 ※石碑列と、その後ろの土塁状の高まり

場城」と同一と思われる。地元での伝承名も「射場（ゆば）城」である。反対側の曲輪Ⅹには伝承名等がない。現在、曲輪Ⅷには北西の土塁状の高まりを背にして3基の大型の石塔、石碑が建っている。1基は板石による年不詳の「三界萬霊」、他の2基はそれぞれ「宮崎城三百五十年祭記念碑」「宮崎城四百年記念碑」で、慶長5年（1600）の宮崎城落城時に亡くなった人々を慰めるため、地元有志によって建立されたものである。

（3）宮崎城跡の口（登城路）

登城路および出入口について、戦国期末の『上井覚兼日記』中には「和田口」、「目曳（之）口」、「野久美口」、「町口」、「柏田口」、「金丸口」の記載がある。「町口」以外は固有の地名を冠したものであり、あるいは「町口」はいずれかと重複する一般的な呼称の可能性も考えられるが、一次史料である『上井覚兼日記』から確認できるのは以上の6口である。また伊東氏の家譜『日向記』（宮崎県編 1999）など一次史料以外のものでは、別の名称も確認できる。

これらの比定については先行研究の多くで検討されている。明治時代の『日向地誌』をはじめ、富永嘉久氏の論考中に掲載された「宮崎城見取図」（直純寺蔵の見取図原本には口の名称が記入されていないが、富永氏の検討によりこれを付加して掲載したものと思われる）、『日本城郭大系』中の石川恒太郎氏による「宮崎城要図」（児玉他 1980）、若山浩章氏の論考（若山 2002）、千田嘉博氏の論考（千田 2004・2009）、『宮崎城跡測量調査報告書』中の「宮崎城周辺の地名」（宮崎市教委編 2009）、八巻孝夫氏の論考（八巻 2013）、新名一仁氏の論考（新名 2018）に考察がある。

現在、宮崎城跡の登城に利用可能な道は4筋あり（令和2年3月現在、倒木被害や路面の陥没等によりうち2筋は通行不能になっている）、最もメインとして利用されている山麓の満願寺跡付近を起点として曲輪Ⅰ（主郭）・Ⅲ（野首城）間の堀切に東から入る道は「満願寺（万願寺）口」と通称され、同名は『日向地誌』にも記載される。千田氏はこれを『上井覚兼日記』の「金丸口」とし、新名氏も賛同する。なお「金丸」は宮崎城跡の山麓北東部に字名として残る（12頁第8図）。このルートについては地域の方から「数十年前に自分たちが上で耕作をするために作った道」との話をうかがったこともあるが、完全に新設されたものではなく、通行の利便性向上のために道の拡幅等をおこなったということかと思われる。

同じく満願寺跡を起点として曲輪Ⅲ・Ⅷ（服部城）間の丘陵鞍部に東から入るルートがあり、千田氏、新名氏は「野久美口」とする。

城麓南東に位置する字後吾田からは曲輪Ⅱ（百貫城）・Ⅴ（彦右衛門城）



写真4 金丸口（満願寺口）現況

間の堀切に入る道が2筋あり、うち曲輪Ⅴの東裾を通って南から進入する道については、先述のとおり八巻氏は新道であろうとし、千田氏も縄張図に図示していないことから同じ見解と思われる。くわえて1978年時点の富永嘉久氏の測量図にも記載されておらず、近年設けられた道の可能性が高い。もうひとつの曲輪Ⅱの南裾を通って東からこの堀切に進入するルートについては、若山氏の論考においてこれに通じる山麓部を「和田口」として図示したのをはじめとして、『宮崎城跡測量調査報告書』、八巻氏、新名氏のいずれも「和田口」としている。なお『日向地誌』では「船ヶ崎口」としている。

これらとは別に、現在日常的に使用されているものではないが、曲輪Ⅰ・Ⅲ間の堀切から西に通じるルートが確認できる。これについては『日向地誌』以降、「目曳口」とすることで各研究者の見解が一致している。

さて先の「和田口」について、その到達点である曲輪Ⅱの南側虎口は城内で唯一、土塁を張り出させた外柵形を志向したものとなっている。同所は「宮崎城見取図」において「大手口」とされており、千田氏、八巻氏ともにこれを主要部の玄関口として評価している。この空間に面する曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切はこれを見下ろすレベルにあり、その堀底には複数の仕切り土塁が確認される。千田氏はこれを外柵形に対する武者隠しとして機能したものと解釈し、八巻氏は発掘調査によって後世の造作でないことを確認する必要性を前提としつつ、本来のものであれば障子堀に似た、堀切内に敵を入れないためのものと評価する。



写真5 和田口（曲輪Ⅱ南側虎口）現況 ※曲輪Ⅴ上より撮影

これに面する曲輪Ⅴ北側墨線には土塁が設けられており、平成30年度調査によって暗渠排水をとまなうものであったことがわかっている。この土塁は堀切対岸の曲輪Ⅱに面するものでもあるが、曲輪間の高低差が大きく、この上にさらに塀などが設けられたのでない限り、曲輪Ⅱに対する防備あるいは日常時の目隠しとしての意味は成していない。また東側、つまり和田口の進入口そのものに面しては土塁が回っておらず、あくまで曲輪Ⅱ・Ⅴ間堀切の堀底に対して設けられたものと理解できる。この曲輪Ⅴ北側における土塁の存在は、先の堀切底の仕切り土塁に対する八巻氏の見解を補強するものであろうが、この虎口空間が城内でも特に厳重な防御上の工夫を凝らしたものであったことは間違いない。

和田口＝大手については、『上井覚兼日記』に「此日、衆中名リ之人数揃候て普請也、和田口之道留候之普請也」（天正11年7月28日条）との記事がある。これについて若山浩章氏は和田口の完全な閉鎖と解釈し、これに替わって大淀川沿いの町への新道開設や町口の重点的整備をおこない、城郭の防備よりも城下の取り込みを重視したと分析した（若山2002）。一方、新名一仁氏はこの「道留」はあくまで一時的な通行止めであり、この間に和田口の全面的な修復がおこなわれたものと解釈する（新名2018）。現況の縄張では、虎口や登城路としての機能を完全に失わせるような破却が和田口におこなわれた形成はなく、新名氏の見解を補強する。

（４）主要部外の遺構

以上が宮崎城跡の主要部であるが、その外側にも小規模な曲輪群や堀切等が存在する。これらは主要部への侵入を防ぐいわば外郭の防御施設や、あるいは城域の拡大・縮小という宮崎城の変遷の中でその位置付けを検討すべきものと思われるが、それらの中に特筆すべき遺構群の存在を八巻氏が指摘している。

八巻氏は宮崎城中心部から派生する尾根上のいくつか、城外側が高くなる位置関係で堀切が設けられている箇所があり、曲輪平坦面や切岸の形成が不明瞭であることから、攻城戦時に敵方が臨時に設けた施設である可能性を指摘している。具体的には、曲輪Ⅱ（百貫城）の東に隣接する曲輪Ⅳ（原著曲輪11）から南東に派生した尾根上における城外側を高所とする堀切と、城内側に対して櫓台を設ける尾根突端の曲輪（原著曲輪12）、曲輪Ⅲ（野首城）から南西に派生する尾根の中程および突端付近に設けられた城外側を高所とする堀切、曲輪Ⅷ（服部城）の西に隣接する曲輪Ⅹから西にさらに北へと向きを変えて延びる尾根上における、城外側を高所とする堀切とその先に設けられた一定面積を持つ2つの曲輪（原著曲輪7・8）の大きく3箇所である。これらについて八巻氏は慶長5年（1600）の伊東氏による宮崎城攻撃時のものと推察しているが、同時に城内側が戦いに際して防備強化のために築いたもの、あるいはもともと城内側の施設だったものが攻城側に占領、改修されたものの可能性もあると指摘している。なお千田氏も曲輪Ⅲ南西尾根上の堀切について、攻城側による構築の可能性を指摘している。

また八巻氏は曲輪Ⅰ（主郭）・Ⅱ・Ⅴ（彦右衛門城）の西麓に、水源の存在を指摘している。曲輪ⅠとⅤのそれぞれから派生した尾根と土塁で囲まれた溜池で、溜池そのものは後世に整えられたものであろうが、これを囲む尾根と土塁は城の水源確保のため中世につくられたものであろうと推定している。

（５）宮崎城跡の縄張

ここまで確認してきた千田・八巻両氏による縄張の分析にくわえ、平成 29・30 年度発掘調査における調査成果から、各曲輪の機能と曲輪配置の関係を検討したい。

宮崎城跡の主要 5 曲輪の配置を確認すると、大きくは南北に伸びる尾根上において、城域中央に単郭の曲輪Ⅰ（主郭）があり、その北と南それぞれに溝や段差で内部を細かく区切る広大な面積の曲輪Ⅱ（百貫城）・Ⅲ（野首城）が配置される。南に位置する曲輪Ⅱの南側には外枅形の、北に位置する曲輪Ⅲの北側には内枅形の虎口が設けられ、主郭へと至るための南北双方の出入口となっている。さらにこの曲輪Ⅱの外側である南には大型の堀切と櫓台がセットになった曲輪Ⅴ（彦右衛門城）が、同じく曲輪Ⅲの外側である北には同じく大型の堀切と櫓台がセットになった曲輪Ⅷ（服部城）が配置される。

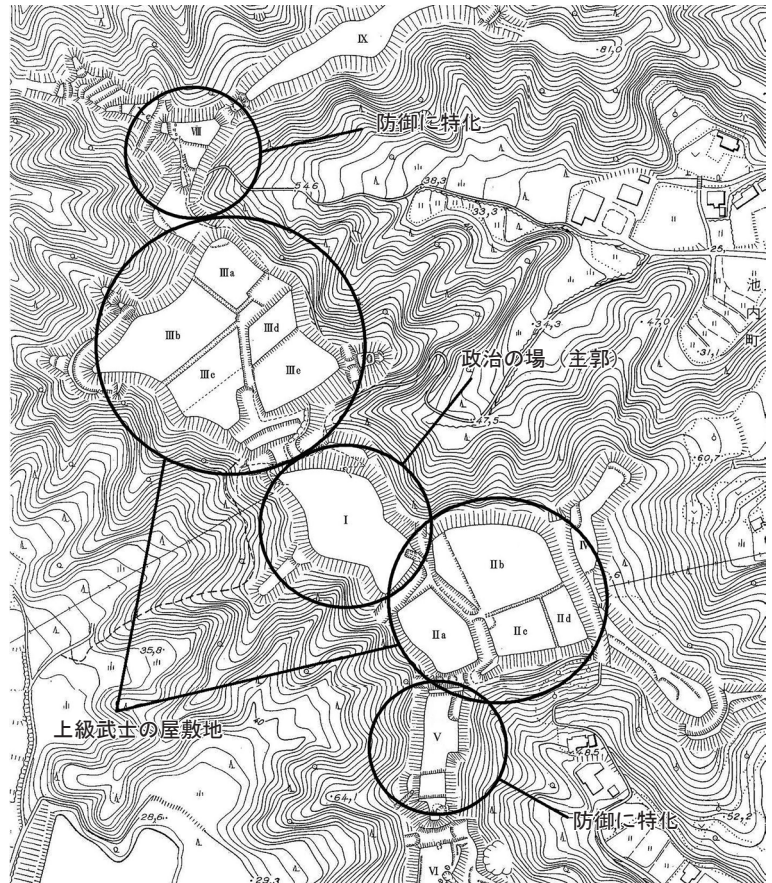
以上の 5 つの曲輪それぞれにトレンチ・調査区を設定して実施した平成 29・30 年度の発掘調査では、曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのいずれにおいても地山や造成土を曲輪面としたピットをはじめとする遺構が高密度で検出された。調査範囲が狭小なためピットの並びを復元するまでには至らないものの、これらの曲輪には当然ながら掘立柱建物が存在したことを示している。遺物は陶磁器、土師器などの日常雑器から、基石のように余暇に関わるものまでが出土しており、この 3 つの曲輪が日常的に使用される空間であったことを明確に示している。縄張の分析においては、改めて言うまでもなく曲輪Ⅰは主郭と位置付けられ、城主の居所、政治の場としての機能を持つ。曲輪Ⅱ・Ⅲは内部に屋敷割がなされており、城内に屋敷を構えた上級武士複数人の屋敷地として、日常的な居住空間として機能した曲輪ということになる。

一方、曲輪Ⅴ（彦右衛門城）・Ⅷ（服部城）の様相はこれと大きく異なる。曲輪Ⅷは近年の削平により遺構、遺物ともにほとんど検出されなかったため詳細を検討することができないが、曲輪Ⅴでは削平造成により礫層に近い高さを曲輪面としていることが判明した。これはあくまで平成 30 年度調査の狭小な調査範囲に限ってのことではあるが、当然ながらこの面は居住施設の主であったろう掘立柱建物の建築には適していない。瓦が出土しているが、織豊期の支城における瓦葺建物の存在は必ずしも日常的な居住を示すものではないということが、慶長期福島領（広島県）における支城の様相を検討した高田徹氏の論考で分析されている（高田 1995）。つまり曲輪Ⅴでは日常的な空間として機能していたことを示す要素が見出されず、非日常的な空間であった可能性を検討する必要がある。曲輪の構造としては城外側に大型の堀切を配し、これに面して櫓台を設けている。また曲輪Ⅱとの間、大手である和田口からつながる堀切に面しては土塁を構え、防御の意識が顕著である。同じくこれら 5 曲輪の中で最も小型の曲輪Ⅷも城外側に対して櫓台と大型の堀切を持つという点で曲輪Ⅴと共通した構造である。日常における居住空間として機能した先の 3 つの曲輪とは異なり、曲輪Ⅴ・Ⅷは日常生活よりも非日常である軍事機能を重視した曲輪と言えるのではないだろうか。

この宮崎城の主要曲輪群の配置については、政治の場である主郭が中心にあり、その両脇に上級武士の屋敷地、さらにその外側に防御に特化した曲輪が位置するという、各曲輪の機能分化が明瞭で左右対称に配置された、極めて計画的な平面構造と言える（第 45 図）。南北それぞれに設けられた外枅形、内枅形をなす虎口空間の内側に位置する曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが平時における地域支配の拠点として機能した中核部であり、非常時にこの中核部防衛という機能を発揮するよう期待されたのが曲輪Ⅴ・Ⅷ

であったと理解できる。

八巻氏は宮崎城跡で特筆すべき、南九州の城ではあまり見られない「突出した防御」として、曲輪Ⅰ（原著曲輪1）虎口の横矢、曲輪Ⅲ（原著曲輪2）西の横堀、曲輪Ⅲ東の陣地、堀切と連動して攻撃できる大型の桁形虎口である和田口を挙げている。これには同じく八巻氏が1987年の論考で指摘していた曲輪Ⅱ（原著曲輪9・10）東側の弧を描く堀切も加えて良いであろう。これらはいずれも曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを防御の対象としており、日常的な中核部が、先の曲輪Ⅴ・Ⅷもあわせた外郭の施設によって嚴重に防御されていたことを物語る。

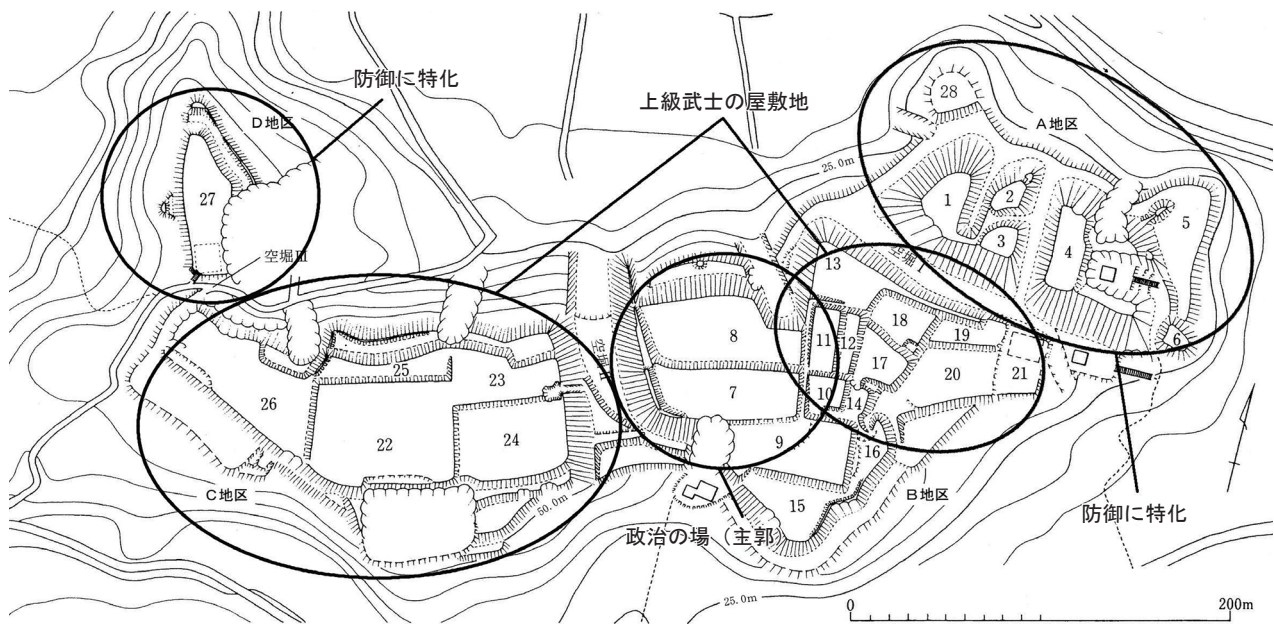


（6）縄張に表出される機能分化と南九州の山城について

第45図 宮崎城跡の機能分化 ※宮崎市教委編2009に加筆

同様に縄張から機能分化が読み取れる南九州の山城としては、宮崎城跡の可視範囲にある穆佐城跡（宮崎市高岡町）を挙げることができる（第2図74・第46図）。穆佐城跡は宮崎平野の西辺に位置し、宮崎城跡と同じく南北朝期から元和の一国一城令まで存続した歴史を持つ。標高60m前後のシラスが卓越した東西に伸びる丘陵（シラス性丘陵）に占地し、シラス土壌の特性を生かした大規模な空堀によってほぼ等高の4つの曲輪群をつくり出している。A～D地区と呼称される4つの曲輪群内は、段差や小規模な堀によって総数30前後の曲輪に細かく分割される。

1992年に千田氏によって縄張図が作成されており、氏はその縄張構造から城域両端のA・D地区を防御主体、その内側に位置する2つの曲輪群のうち、主郭を含むB地区を政治中枢・城主一族の屋敷地、C地区を上級家臣の屋敷地と分析し、「一連の曲輪群の機能分化が明瞭に復元できる」としている（千田1992）。この千田氏による分析を更に突き詰めれば、B地区の「城主一族の屋敷地」という位置付けについては、15の曲輪からなる同地区の一面に島津氏9代忠国の生誕地と伝えられる曲輪の存在することによるが、これは室町初期の事象のため、最終段階の縄張を検討する上ではあまり重きを置かない方が良いと思われる。城主の「一族」をどこまでの範疇で捉えるかという問題もあるが、穆佐城跡主郭（曲輪7・8）は先の宮崎城跡主郭を上回る5,700㎡の面積を持ち、少なくとも城主「家族」の居住空間は主郭内で十分におさまるものと思われる。またB地区は1～3m前後の段差によってつくり出された各曲輪が、主郭を最高所として難壇状に展開する。段差によって複数の区画をつくり出す構造はC地区と共通しており、B地区における主郭をのぞいた各曲輪の機能については、C地区と同じく城内に居住する上級武士の屋敷地と見て良いかと思われる。



第 46 図 穆佐城跡の機能分化 ※千田 1992 に加筆

このように考えると、穆佐城跡の縄張は政治の場である主郭を中心として、その両脇に上級武士の屋敷地、さらにその外側に防御に特化した空間が位置するという、宮崎城跡とまったく同じ縄張配置ということになる。ただし穆佐城跡の主郭は、西側の居住空間に対しては大規模な空堀と土塁を構えるが、東側の居住空間、つまり主郭と同じ地区内にある他の曲輪に対しては、地区内の最高所であることと他の曲輪にはない土塁を有することによって、かろうじてその優位性を表出している。

一方、宮崎城跡は大規模な堀切によって主郭を両脇の居住空間から完全に切り離し、主郭の隔絶性をより顕著に表出させている。主郭の求心性という観点からは、穆佐城跡よりも宮崎城跡の方がより一貫性のある縄張と言える。ただし宮崎城主郭の持つ求心性は、あくまで機能面の検討によって平面構造上に見えるものである。高所を占めて曲輪間連携の中心にあり、作事物も含めてその優位性を明確に可視化した織豊系城郭の主郭が持つ求心性とは、その度合いが大きく異なる。

南九州においては、このように曲輪配置から機能分化が明確に読み取れる山城自体が稀である。当然ながらこれは、各曲輪の機能分化がなされていた城郭が宮崎城や穆佐城だけだったということではない。すべからく城の各曲輪はそれぞれに機能を付されて運用されていたはずであり、単に宮崎城跡等ではこれが縄張上で見え易く、後の節で述べる特徴的な縄張を持った他の南九州の拠点城郭では読み取りにくいということであろう。今後は、宮崎城跡と同様な機能分化が他の南九州における拠点城郭でも見出されないか否か、見出せる場合どのようなレイアウトとなるか、その中での主郭の位置付けはどうか、主郭の持つ求心性がどのようなものか等の検討をおこなうことで、南九州の城郭研究をさらに深化させられるのではないかと考えられる。

【引用・参考文献】

瓜生野・倉岡郷土誌編集委員会編 1986 年『瓜生野・倉岡郷土誌』宮崎市北地区振興会

児玉幸多・坪井清足監修 1980 年『日本城郭大系』第 16 巻 大分・宮崎・愛媛 株式会社新人物往来社

千田嘉博 1992 年「穆佐城址について」『高岡町遺跡詳細分布調査報告書』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 2 集 高岡町教育委員会

千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館

千田嘉博 2009 年「宮崎城の構成」『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 75 集 宮崎市教育委員会

高田 徹 1995 年「慶長期における本城・支城構造―福島・毛利領を中心として―」『中世城郭研究』第 9 号 中世城郭研究会

富永嘉久 1978 年「宮崎城址及びその周辺」『会報』第 3 号 宮崎県地方史研究会

新名一仁 2018 年「『上井覚兼日記』にみる土木事業―城郭普請を中心に」『戦国大名の土木事業 中世日本の「インフラ」整備』戎光祥出版株式会社

野口逸三郎校訂・解題 1976 年『日向地誌（復刻版）』青潮社

宮崎県編 1999 年『宮崎県史叢書 日向記』宮崎県

宮崎市教育委員会編 2009『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 75 集 宮崎市教育委員会

八巻孝夫 1987 年「宮崎城」『図説中世城郭事典』第三巻 株式会社新人物往来社

八巻孝夫 2013 年「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第 27 号 中世城郭研究

若山浩章 2002 年「中世城郭の普請と作事 ―『上井覚兼日記』に見られる宮崎城の普請と造作を中心に―」『宮崎県地方史研究』第 15 号 宮崎県地域史研究会

第 2 節 文献史料からみた宮崎城跡

報告書末尾に示した宮崎城跡に関する史料をもとに、文献史料から見た宮崎城跡について考察する（掲載史料は末尾に（史料編）と明記した）。

（1）宮崎庄と宮崎城跡

宮崎城跡が位置する大淀川左岸を大きく含む一帯は、豊前宇佐八幡宮領の荘園として成立した宮崎庄にあたる。建久 8 年（1197）の凶田帳には「宮崎庄三百丁」とあり、地頭に鎌倉幕府の御家人中原親能を示す「前ノ掃部頭殿」の名が見える（「島津家文書」宮崎県編 1994）。この宮崎庄の総鎮守は奈古八幡社で、『宮崎県史 史料編中世 1』に中・近世文書 88 通が紹介され、同庄の歴史を物語る貴重な史料となっている（宮崎県編 1990。以下、特に典拠を示さないものは奈古神社文書）。

この奈古神社文書に見える地名から、宮崎庄の荘域を探ってみよう。享禄 2 年（1529）の「奈古宮遷宮入用日記写」は、同庄が「南方」「池内方」「北方」に分かれていたことを示している。現在も南方町、池内町、上北方、下北方の地名が残っており、これらの地域が宮崎庄の荘域であったことは容易に推測できる。また、他の寄進状等から、「南方」には「笠本」「江良」、「池内方」には「萩藭」、「北方」には「和田」「萩原」「原之藭」の地名が確認できる。「北方」の「和田」は、宮崎城跡の南に現在も地名が残る前吾（わ）田、後吾田の辺りであり、「南方」の「笠本」は、文書内に「宮崎庄笠本村内奈古大宮司」と見えることから、現在の奈古神社が鎮座する付近の地名であることがわかる。さらに、寛正 6 年（1465）の「神事注文写」には、宮崎庄の村名として「和田」「池内」「笠本」「柏田」「本村」「和知瓦」が見える。「柏田」「和知瓦」は柏田（大字瓜生野）、和知川原（1～3 丁目）として、現在も地名が残る。宮崎庄の荘域が、前述した池内町～下北方町付近から、さらに大淀川左岸の下流

域一帯まで、広範囲に及んでいたことがうかがえる。宮崎城主上井覚兼が天正11年（1583）に城と柏田を結ぶ道を普請し、翌年、和知川原に新町を立てさせているが、その背景には、これらの地域が当初から宮崎庄の荘域に含まれ、宮崎城の支配が及ぶ範囲にあったことがわかる（『上井覚兼日記』）。

次に、奈古神社文書から、宮崎庄における支配の変遷を見てみよう。すでに鎌倉初期の建久8年の地頭に御家人中原親能がいたことに触れた。正中2年（1325）の「鎮西下知状」には、宮崎庄の地頭に「戸次左近蔵人貞頼」の名が見える。戸次氏は、豊後大分郡戸次庄（現大分市）より起こった大友氏一族で、観応2年（1351）の「戸次頼時譲状」（立花家文書、宮崎県編1994）には「日向国宮崎庄惣領分地頭職」が戸次氏の「或重代相伝之所領、或元弘・建武勲功地」として記されている。鎌倉後期から南北朝期までは重代相伝の所領として戸次氏の手にあったと見てよいであろう。なお、永徳3年（1383）の「大友親世当知行所領所職注文案」（立花家文書、宮崎県編1994）には「日向国守護職」とともに「同国宮崎庄」が所領として見える。

室町期になると、宮崎平野は伊東氏と島津氏の争奪の地となる。文安元年（1444）に家督を継承した伊東祐堯は、曾井城、穆佐城などを次々に攻略、同3年には宮崎城を攻め落とし、宮崎庄を支配下に置いた（『日向記』「祐持所々御退治事」（史料編）。伊東氏は、その領国支配において当初は南北朝期の代官の機能を継承した（宮崎県編1998）。それは宮崎庄においても同様で、文安3年の「代官祐守寄進坪付写」のごとく、代官が発給する文書が確認できる（宮崎県編1998では「祐守」を長倉氏の執事としている）。また、前述の享禄2年（1529）の「奈古宮遷宮入用日記写」には、「南方」「池内方」「北方」の代官として、それぞれ伊東氏家臣の稲津修理亮、右松左京亮、右松族右衛門の名が見える。また、『日向記』の「門河対治并祐吉早世事」（史料編）には、長倉能登守らに擁立され家督を継承した伊東祐吉が天文3年（1534）2月19日に宮崎城に入城し、「御住宅」した記事が見える。奈古神社文書には、祐吉が同年4月13日に「修理田壺町」を奈古八幡社に寄進したことを示す文書が残されている。

奈古神社文書中には、宮崎城跡を指していると考えられる（「城」の文言が見える）文書が2通ある。大永8年（1528）の「上別府祐子寄進状写」（史料編）には寄進の願意に「城内安全」の文言が見える。寄進者の上別府祐子は、代官に任ぜられた伊東氏家臣であろう（上別府氏は『日向記』の「分国中城主掇事」「諸侍衆惣領一人撰事」それぞれに名が見える。祐子はその一族と考えられる）。寄進地「上別府」は、現在の瀬頭、上ノ町、大工町（いずれも宮崎市）辺りのことで、宮崎庄には含まれていない。「城内安全」が宮崎城跡を指しているかどうか、なお検討を要する。

もう1通は年末詳9月10日の「炎綱・祐存連署状写」（史料編）で、奈古八幡社に「御宿」を調えるよう命じたものであり、「城内屋作」の文言が見える。宮崎城では「御宿」として不便（文言の後に続く「不使」は「不便」の誤写か）、地下にも適当な場所がないという意味で捉えると、「城内屋作」は宮崎城を指すと採れる記述と言えよう。「炎綱」は通字の「綱」から野村氏一族であろう。野村氏は『日向記』中「御感状連判人数」に名が見えることから、その連署状として発給されている。

『日向記』の記述から、伊東氏が宮崎城に城主を置いていたことが分かる。文安3年（1446）には落合彦左衛門尉、「分国中城主掇事」には肥田木勘解由左衛門尉・長嶺紀伊守・肥田木越前守の名が宮崎城主として見える（史料編）。この「城主」は、『日向記』「覚頭合戦敗北事」に記す「地頭」と同義と思われるがその実態は不明である。また、現在のところ、宮崎城主が在地（宮崎庄）の支配に関わったことを示す史料は残っていない。先に述べた「代官」や奈古八幡社との関係を示す史料もな

く、宮崎庄内における位置付けは不明である。さらに史料の検討が必要であろう。

（２）戦乱に係る文献史料

史料編に掲載した史料は、『上井覚兼日記』を除けば、ほとんどが戦乱に係る史料と言っていい。これらの史料をもとに、宮崎城で繰り広げられた戦乱について見ていく。

建武３年（1336）２月７日の「土持宣栄軍忠状写」２通（いずれも史料編）は、本稿第１章第２節でも触れているが、宮崎城の史料上の初出である。足利方として戦った土持宣栄が前年１２月以来の南朝方と合戦に及んだ「軍忠」を「島津庄惣政所」「守護御奉行所」に宛て披露したものである。この一連の合戦の中で、建武３年１月１４日に「宮崎池内城」に立て籠もる「一坪入道慈圓」とその甥らを生捕り殺害したことが記されている。この「一坪」は、同日付け守護御奉行所宛ての文書には「圖師」と記す。一般的に図師は、古代の国・郡や荘園で図帳・田図等の作成にあたった役人として知られるが、慈圓らは、それらの図師を出自とする一族であろう。後世に記された『日向記』『伴姓兼重賦（伴姓肝属氏系譜）』（ともに史料編）の記述は、土持宣栄軍忠状を踏まえた内容となっている。この時の宣栄らの軍功は、後に足利氏に上申され、その恩賞として宣栄の子時栄に宮崎庄北方内の「和田村半分（勘解由左衛門跡）」が与えられたことが土持文書（宮崎県編 1990）で確認できる（康永３年（1344）３月３日「若林秀信挙状」、貞和４年（1348）８月９日「某袖判宛行下文」）。

称寝文書に、宮崎庄において合戦が行われた、もしくは行われようとしていることを記した文書が２通ある。いずれも伊東氏が宮崎に「勢遣」という表現となっている。年末詳 7 月 15 日の「島津忠国書状写」（史料編）は、「仍山東之事、伊東宮崎ニ勢遣けるか、打負候て在所へ引帰候之由其間得候」と、伊東氏が宮崎を攻め、在所（都於郡）に引き返したとの伝聞を伝えている。書状に、「末吉城こしらへ」「旁御越候者喜可存候」とあることから、忠国が末吉に隠居した永享４年（1432）以降のものとわかる。文安３年（1446）６月には、伊東祐堯が宮崎城を攻め落としているが（『日向記』『祐持所々御退治事』（史料編）、この事件に関する伝聞か、あるいはそれ以前の伊東氏の動きなのか、詳細は不明である（宮崎県編 1994 は文安３年の可能性を示唆している）。また、年末詳 7 月 12 日の「島津忠治書状写」（史料編）には、宮崎から鹿児島に遣わされた使僧が、伊東氏から攻められているため、合力を求めていることが記されている。忠治が当主であった永正５年（1508）から同 12 年（1515）までの書状と思われる。

宮崎城に関する合戦でよく知られているのが、慶長５年（1600）９月晦日から１０月朔日にかけて行われた、伊東氏家臣稲津掃部助による宮崎城攻めである。この時宮崎城は、縣高橋氏領でその家臣榎藤種盛が城代として在城した。『日向記』に記す城攻めの経過を以下に示す（「左京亮祐慶日州へ下着宮崎ノ城ヲ攻取事」（史料編））。

○晦日の夜、清武勢 3000 余人が川を渡り、先手の 300 余人が関をあげる。

○榎藤父子は、清武勢が小勢と思い、城を打って出るよう下知す。

○先手は麓にて放火し、四方から城に攻めあがる。

○榎藤父子 3 人をはじめとする城勢が防戦するも、父子 3 人痛手にて本丸に引き込む。

○万貫寺（満願寺）が出て降参を乞うも、清武勢は聞き入れず、翌朔日に落城す。

○城主榎藤種盛以下城兵 100 余人、外雑兵に至るまで討死する。その後、稲津掃部助が在城す。

この合戦について記す軍記に『稲津掃部合戦記』がある（史料編）。清武勢は渡河の後、北方村に

て休息し、東向きの手門から城に攻めかかっている。大手の様子を「谷相にて双方は屏風を峙たるか如也」と表現し、北側の「満願寺口」とは別記している。現在の前吾田・後吾田方面の登城路が想定できるが、合戦の日付を10月30日とするなど、史料に誤った記述も多い。

宮崎城攻めに関しては、黒田如水が稲津掃部助など伊東氏家臣に宛てた2通の書状が『日向記』に収められている（「左京亮祐慶日州へ下着宮崎ノ城ヲ攻取事」）（史料編）。9月28日の書状では、如水から稲津掃部助他2名に宛て、関ヶ原の合戦後の九州の仕置きとして、宮崎城を攻め取る等の指示を申し送っている。また、10月19日の書状では、如水から稲津掃部助に宛て、宮崎城攻めの軍功を「無比類」と賞している。

（3）『上井覚兼日記』に見る宮崎城

『上井覚兼日記』（以下『日記』と略す）については、すでに第1章において概略記述している。ここでは、特に城跡の構造に関係がある記述に焦点を絞りながら考察を加えたい。なお、表9は、若山浩章氏作成の表（若山2002）を参考にし、さらに城の各施設の広さや使われ方に関する記事を追加して作成したものである。

①城内への居住

覚兼の統括下では、衆中は「城内之衆中」と「麓之衆中」、衆中以外は覚兼の家臣である「倅（かせ）者」がいた。このうち「城内之衆中」については、天正13年（1585）1月1日の記事に「城内之衆中廿人計二三献参会候」、翌日にも「鎌田源左衛門尉殿、其外城内衆中へ礼申候」とあることから、20人以上が宮崎城内に居住していたことがわかる。桑波田興氏は、『日記』から判明する「城内之衆中」は鎌田源左衛門尉（覚兼の実弟）、関右京亮、柏原有閑の3名とし、この3名が登場する場面から、彼らが地頭の外城統治における補佐役として重要な役割を果たしていたことを指摘している（桑波田1983）。また、覚兼は彼らに「殿」を付け、他の衆中と区別しているが、時には「鎌源」など略称を用いる場合も見受けられる。覚兼が彼らのことを島津氏直臣として尊重しながらも、日頃から親近感を持っていた様子がうかがえる。

城に衆中が居住した事例は他にもある。同じ島津氏の高岡では、慶長5年（1600）に外城が取り立てられてから同7年までの間、天ヶ城に14名の衆中が居住したことが史料に見える。以下は、その抜粋（中原家文書「野尻名勝誌・高岡由緒」）。

一移之節城内江被召置候人数屋敷

一下屋敷壹反 御代官所

一荒屋敷四畝廿歩 本田吉左衛門

（13名略）

一下々屋敷八畝 本丸

右人数天ヶ城之内ニ罷居候処、城内居住不相成段、慶長七年寅従公義被仰渡、麓江屋敷夫々被仰付候

天ヶ城には、「本丸」8畝と「御代官所」1反のほか、1畝～5畝余歩の衆中屋敷があった。江戸後期の記録ではあるが、今後行われる宮崎城跡の発掘調査において、衆中屋敷の解明の参考史料となるだろう。なお、千田氏は「倅者」は覚兼に近侍して親衛隊的な役割を負っており、職務から覚兼の館に近接して屋敷を持っていたとする。また、麓に屋敷を持ち、在番のための詰所が要所にあった可

能性も指摘している（千田 2004）。いずれにせよ、今後の発掘調査を待つほかない。

②城内の施設

宮崎城内にあったと考えられる施設については、『日記』に記す「普請」「造作」「作」「誘（こしらえ）」など、覚兼が行った土木事業に関する記事から推測できる（若山氏は、覚兼が「普請」を土木的な事業、「作事」を建築的な事業として区別していたことを指摘している）（若山 2002）。

『日記』に見える施設の建設は、天正 11 年（1583）1 月 30 日から始まる「風呂」の「造作」が最初で、その後、「毘沙門堂」（11 年 4～5 月）、「茶湯之座」（11 年 4～5 月）、「弓場（坪之弓場）」（11 年 5 月ほか）、「厩」（12 年 11 月）と続く。このうち、「毘沙門堂」と「茶湯之座」は、土地の造成（「普請」）から始まり、その後に建物の「造作」を行っている。4 月 28 日に「毘沙門堂作番匠衆、其外諸細工等」に酒を振舞っているのは、「造作」の開始に先立ってのことか。5 月 1 日には、「番匠」「金銀之細工」「刀之鞘細工」「塗師」などの仕事を覚兼が見廻っている。若山氏によれば、これらの職人の存在が、完成した建造物の豪華さや精緻さをうかがわせるといえる（若山 2002）。また、千田氏は、これらの職人集団が覚兼に直属した職人であり、主郭内にその工房が存在した可能性を指摘する（千田 2004）。それは、「毘沙門堂」「茶湯之座」の「造作」が成った後にも、「諸細工させ」（12 年 8 月 10 日）、「手火矢細工」（13 年 3 月 18 日）などの記述が見られることから、何らかの工房（作業場）が城内に存在したことがわかる。特に、装剣工として登場する「上野弥左衛門尉」は、覚兼のために製作した刀の鍔が島津義久の関心と呼ぶほどの名工で、度々覚兼はその作業の様子を見廻っている。

それぞれの施設の配置や大きさは、『日記』中に表れる日々の出来事から推測できる。天正 11 年 2 月 14 日に福昌寺（現鹿児島市）住持代賢を「内城」に招いた際の接待は、まず主殿で「御めし」の饗応があり、その後「奥座」で内々の「押肴にて御酒」、最後に「茶湯之座」での「点心」へと続く。こうした建物や部屋を使い分けた、室町期の武家儀礼に則った接待のあり方からは、主殿、会所、茶室といった建物群を廊下で結んだ御殿群が想定される（千田 2004）。また、「棧敷」では「酒宴」「乱舞」、庭では「蹴鞠」「（馬の）庭乗」「柏田より踊来」、毘沙門堂では「法楽之連歌」が行われたことが記され、それぞれの施設の大きさを想像することができる。

③「普請」と城のメンテナンス

『日記』で確認できる宮崎城の登城路は、「柏田口」「和田口」「目曳之口」「野久尾口」「町口」「金丸口」の 6 箇所、本章第 1 節（3）において考察している。ここでは、『日記』中の「普請」が指す意味を中心に若干の考察を加えたい。

覚兼は『日記』のなかで、綿密に計画され、長期間に及ぶ土木工事から日々の手入れと思われる土木作業まで、すべてにおいて「普請」という文言を用いている。天正 11 年（1583）閏 1 月に見える「柏田」の「道作之普請」は、「新路」とあり、事前に「普請之義談合」としていることから、大規模な工事であったことが推測できる。また、天正 13 年 1 月から 11 月まで行われた「町口」の「普請」についても、「城戸」や「垂」を建てさせていることや、半年以上に及ぶ工事期間から規模の大きさがうかがえる。

一方、「和田口直し候普請」（11 年 6 月 23 日）、「此朝、普請目曳之口ニさせ候」（12 年 7 月 29 日）という書きぶりは、臨時的な作業を思わせるもので、実際に作業も数日で終わっている。「例之掃地、普請等させ候」（11 年 6 月 19 日）という記事を見ても、「掃地」＝掃除と「普請」が同程度の作業として捉えられていることがわかる。さらに、天正 13 年 7 月 18 日の記事は「城之草払」「岸（切岸のこと）切せ」とあり、具体的な作業までわかる。「水流（つる）之普請」（12 年 6 月 3 日）も臨時的な「普

表9 『上井覚兼日記』に見える宮崎城関連記事

在城期間	年月日	関連記事	番号
天正11年1月21日～ 2月26日	天正11年1月26日	「城内の衆中へ礼儀」	(1)
	天正11年1月27日	「麓之衆中へ礼儀」	(2)
	天正11年1月30日	「風呂造作打立候也」	(3)
	天正11年閏1月4日	「庭前二木なとあまた裁させ候て見申候」	(4)
	天正11年閏1月15日	「(衆中参会し)普請等之儀談合」	
	天正11年閏1月18日	「風呂建させ候とて、終日普請させ候」	(5)
	天正11年閏1月21日	「柏田と城との間の道作せ候、新路にて候」	(6)
天正11年4月8日～ 8月21日	天正11年閏1月27日	「柏田と城之間之道作之普請」	
	天正11年2月14日	「福昌寺御礼とて御光儀」	(7)
	天正11年4月19日	「毘沙門假堂作二打立候」	(8)
	天正11年4月20日	「堂作番匠四、五人にて仕候」	
	天正11年4月21日	「茶湯座作候する覚悟之處二、樹なとさせ候」	
	天正11年4月22日	「茶湯之座之普請させ候」	
	天正11年4月23日	「毘沙門堂地の普請共させ候」	
	天正11年4月28日	「毘沙門堂作番匠衆、其外諸細工等多々居候に、御酒振舞」	
	天正11年5月1日	「堂作之番匠、又ハ金銀之細工・刀之鞘細工・塗師など見候」	
	天正11年5月3日	「毘沙門堂造畢」	
	天正11年5月6日	「毘沙門堂二茶湯仕懸、衆中なとあまた寄合」	
	天正11年5月8日	「弓場普請各衆中へさせ申候」	
	天正11年5月10日	「朝普請二、坪弓場誘させ候」「拙者手之衆共、坪弓場にて弓之事」	
	天正11年5月11日	「弓場普請先日之關衆にてさせ申候」	
	天正11年5月12日	「弓場普請之為跡見候するとて、乗物にて麓へくたり候」	(9)
	天正11年5月13日	「此日より茶湯座造作企候」	
	天正11年5月18日	「爰元座敷造作最中取乱候間」	
	天正11年5月29日	「掃地・普請各へさせ候」	
	天正11年6月2日	「從都於郡來候番匠柿置飛驒拯、暇乞候て帰候」	
	天正11年6月19日	「例之掃地・普請等させ候」	(10)
	天正11年6月23日	「此日より和田口直し候普請也」	
	天正11年6月27日	「此日、和田口普請上候」	(11)
	天正11年6月30日	「内城にて各へ御会尺也」	
	天正11年7月26日	「弓場、朝普請させ候」	
	天正11年7月28日	「衆中名々之人勢揃候て普請也、和田口之道留候之普請也」	(12)
	天正11年8月9日	「夜入候てより棧敷にて乱舞也」	
天正12年5月12日～ 6月10日	天正12年5月22日	「若衆達被來候、鞠にて候」	
	天正12年6月3日	「水流之普請共させ候」	
	天正12年6月4日	「殊之外洪水也、此日、普請させ候て見申候」	
天正12年7月7日～ 8月27日	天正12年7月13日	「坪之弓場普請させ候」「坪弓場にて的射候て慰候」	
	天正12年7月15日	「此日、柏田より踊來候、見物申候」	
	天正12年7月17日	「此日曳目之口弓場普請、衆中被指揃いたされ候、普請あかり候て」	(13)
	天正12年7月22日	「弓場朝普請させ候て見申候」	
	天正12年7月29日	「於毘沙門堂法樂之連歌仕」「此朝、普請目曳之口ニさせ候」	(14)
	天正12年7月30日	「目曳之口普請也」	(15)
天正12年10月29日～ 11月24日	天正12年8月24日	「わち川原二船繋(繋力)候する入江候由」「其邊二村を仕立」	(16)
	天正12年11月16日	「野久尾之口之普請させ也」	
	天正12年11月17日	「厩作せ候番匠などへも御酒二而慰候」	
天正12年12月16日～ 天正13年1月27日	天正12年12月20日	「和知川原へ新町立させ候」	
	天正13年1月1日	「城内之衆廿人計二三献参会候」	(17)
	天正13年1月17日	「庭二かゝりの松なと裁させ」「茶湯之座見越二常盤木なと種々裁させ」	(18)
天正13年3月8日～ 4月21日	天正13年3月11日	「久馬共留守にて不乗候間、庭乗なとさせ候」	
	天正13年1月18日	「町口普請之談合共申候、様子なと普請奉行へ見せ申候」	
	天正13年1月21日	「町口普請させ候」	
	天正13年4月20日	「谷口和泉拯三男、日州居留同前二城戸之番等させ」	(19)
天正13年5月20日～ 閏8月5日	天正13年5月22日	「此方風呂焼せ候て、城内之衆中又者拙者忤者共寄合、入候て慰候」	
	天正13年5月24日	「終日若衆達基・将基・双六」「水流之普請なとも申付させ候」	
	天正13年6月16日	「内城へ然と候へ」「若衆中内城庭にて鞠也」	
	天正13年7月2日	「此日、弓場普請アリ」	
	天正13年7月5日	「掃地・普請させ候」	
	天正13年7月18日	「城之草払させ候て見申候、岸切せ候処も候、然者已上普請也」	(20)
	天正13年7月19日	「此日も草払、昨日一日にハ不事成候間、普請させ候」	(21)
天正13年10月20日～ 天正14年1月4日	天正13年閏8月5日	「城戸建させ候」	(22)
	天正13年10月26日	「從其直二町口普請させ候」	
	天正13年11月29日	「普請なとさせ候」	
天正14年1月27日～ 2月16日	天正13年11月30日	「町口垂なと立させ、普請させ候」	(23)
	天正14年1月28日	「此日、終日普請見申候」	
	天正14年2月9日	「柏田口普請之下知共申付置」	
天正14年3月1日～ 5月27日	天正14年2月13日	「衆中各普請二被出候間、直二普請見申候」	
	天正14年4月17日	「此日、金丸江(口)普請、終日させ候」	
	天正14年4月29日	「金丸口普請させ候」	

(註) 表中の番号(1)～(23)は、巻末に掲載した史料編の番号を記した。

請」であろう。翌日の記事に「殊之外洪水也」とあるので、大雨に備えて、もしくは大雨の影響を受けての水路の「普請」と分かる。これら「山城のメンテナンス的」（若山 2002）な「普請」の多くは、6 月～7 月に集中する。草払いや登城路・切岸・水路の手入れが山城の機能維持にとって重要な作業であったことがわかる。

【引用・参考文献】

- 桑波田興 1958 年「戦国大名島津氏の軍事組織について」『九州史学』第 10 号（福島金治編『島津氏の研究』戦国大名論集 16、1983 年に再録）
- 千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館
- 宮崎県編 1990 年『宮崎県史』史料編 中世 1 宮崎県
- 宮崎県編 1994 年『宮崎県史』史料編 中世 2 宮崎県
- 若山浩章 2002 年「中世城郭の普請と作事 ―『上井覚兼日記』に見られる宮崎城の普請と造作を中心に―」『宮崎県地方史研究』第 15 号 宮崎県地域史研究会

第 3 節 南九州における宮崎城跡の位置付け

（1）南九州の群郭式城郭と宮崎城

宮崎・鹿児島県域および熊本県南部のいわゆる南九州では、拠点城郭を中心として特徴的な縄張を持つ一群がある（第 47 図）。鹿児島県の知覧城跡や清色城跡、志布志城跡、宮崎県では都於郡城跡や都城跡などを典型例とし、多くはシラス台地の端部に占地する。城域内に大規模な空堀を縦横に入れ、もとが台地であるがゆえに主郭を含む各曲輪間に顕著な高低差が生じず、等高の曲輪が群島状になってひとつの城郭を形成する。この構造はやわらかく人力での加工が比較的容易なシラス土壌の台地が卓越するという南九州の地質的な要因によるところが大きい。

これら南九州に特徴的な山城については、村田修三氏による「辺境型」・「南九州型」（村田 1987）、千田嘉博氏による「九州館屋敷型城郭」（千田 2000）、中井均氏による「南九州型城郭」（中井 2016）等、複数の研究者により多種の名称が提起されているが、近年では「群郭式」の呼称に落ち着いている（南九州城郭談話会・北部九州中近世城郭研究会編 2013、吉本 2018）。以下ではこの南九州の群郭式城郭と宮崎城跡の関係について検討してみたい。

まず宮崎城跡の縄張について、千田氏は「南九州の典型的な中世城郭の形態」とし（千田 2004・2009）、八巻孝夫氏は「典型的ではないにしろ群郭式城郭の範疇に入ることになる」としている（八巻 2013）。宮崎城跡はほぼ等高の曲輪が丘陵上に並び、主郭が見た目にも明らかな高位を占めず、曲輪間の連携性が低い。このような縄張はまさに群郭式城郭の特徴であるが、縦一列の曲輪配置はいわゆる群島状ではなく、南九州の群郭式城郭として典型的な構造とは言い難い。

地質としては、山体の大半が四万十累層群の上に堆積した泥岩と砂岩の互層からなる宮崎層群と呼称される岩盤層によって構成される。その上部に更新世の河川作用で形成された拳大から人頭大の円礫層が数 m 堆積し、さらにその上に全体から見ればわずかばかりのシラス土、ローム土等が載る。現況の堀切壁面を観察する限り、曲輪をつくり出す普請の中心は、岩盤層より上の円礫層以上において



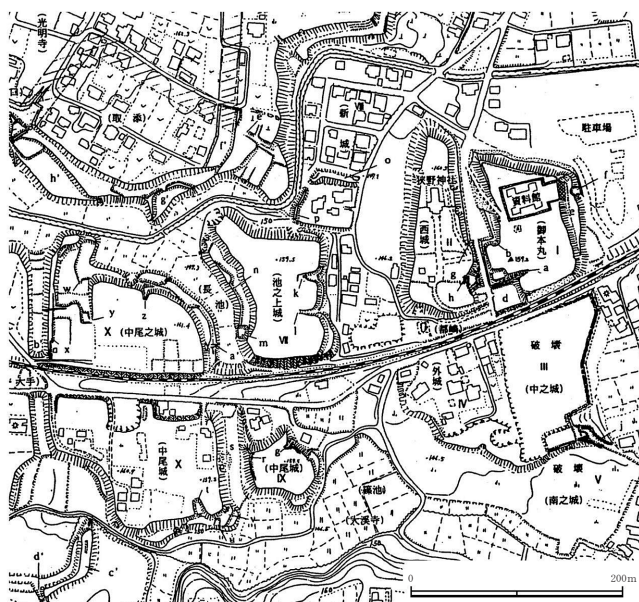
鹿児島県知覧城跡



鹿児島県清色城跡



宮崎県都於郡城跡



宮崎県都城跡

第 47 図 南九州の群郭式城郭諸例

※知覧城跡縄張図（知覧町教委編 2006）：千田嘉博氏作成、清色城跡縄張図（三木 2005）：三木靖氏作成、
都於郡城跡縄張図（宮崎県文化課編 1999）：八巻孝夫氏作成、都城跡縄張図（都城市史編さん委編 2006）：八巻孝夫氏作成

おこなわれている。礫層において堀切等の造作をおこなうには、日常的なメンテナンスを含め多大な苦勞をともなったものと思われるが、シラス土を主体としない山体に築かれていることは、典型的な南九州の群郭式城郭と異なる点である。

つまり縄張、地質ともに、宮崎城跡は南九州における大型拠点城郭としてややイレギュラーな山城と言える。しかしその歴史を見ると、戦国期の伊東氏時代は家督候補の伊東祐吉が居所とし、同じく当主義祐が数年間在城するなど、本拠都於郡城に次ぐ重要拠点として位置付けられている。さらに戦国期末の島津氏時代には老中上井寛兼の居城として、日向国経営の中心的存在であった。このように日向国における最重要拠点として機能した理由については、宮崎城が宮崎平野南部を一望し、九州第



写真6 平成30年台風第24号の被害で剥き出しになった佐土原城跡の岩盤斜面

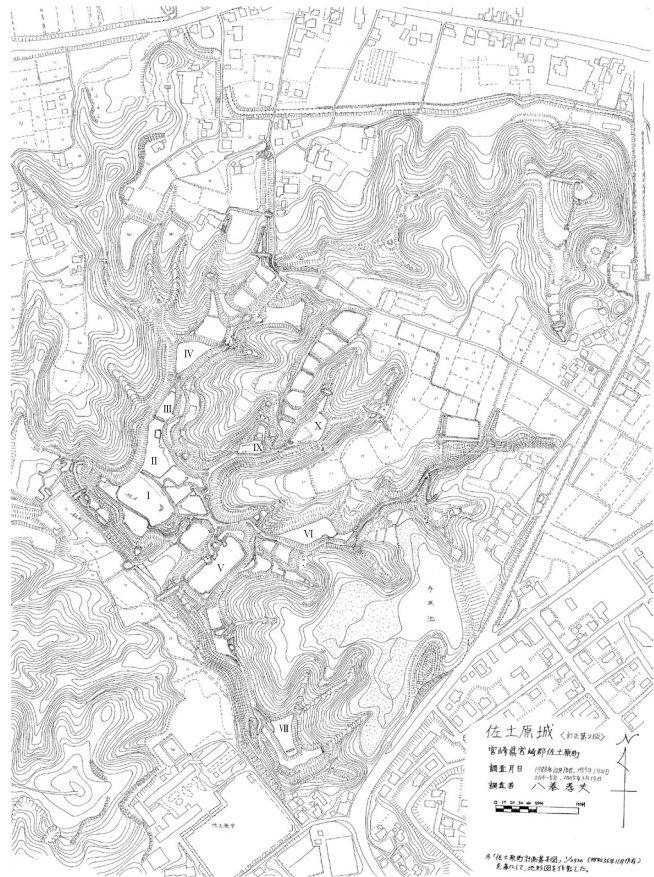
2の大河大淀川を臨む位置にあるという地域支配の拠点としての地政学的要因が大きいと思われる。

しかしながら軍事施設としての城郭という点で考えると、群郭式城郭の運用に長けていたであろう南九州諸勢力が最重要拠点として使用し続けたからには、宮崎城は一見イレギュラーな構造ながら、南九州世界で城郭に求められた必須の構成要素を十分に兼ね備えてい

たものの可能性がある。これを考える上で重要なのは、中井均氏による「切岸こそが山城にとって最大の防御施設」であり「登らせないことが最大の防御」との指摘である（中井2016）。氏は「その究極の切岸が南九州の城に見られる」として、南九州の群郭式城郭における垂直に削り込まれたシラスの切岸を重要な防御的要素と評価している。

これを踏まえて宮崎城跡を見ると、宮崎層群の岩盤による山体は、一見、垂直に近く削り込む切岸の造作が困難で、上記の要素を持った南九州の群郭式城郭に匹敵する軍事施設とはなり得ないようにも思える。しかしながらこの岩盤斜面は本来的に一面平滑で角度を持ち、人工で加工するまでもなく敵の登坂を阻む強力な防御施設となりうる。つまり宮崎城は岩盤による山体斜面を防御の要とし、その要素において南九州の拠点城郭として必須の要件を満たしていたと理解することができる。同様な地質条件と歴史的位置付けを持つ城郭として、宮崎城跡から直線距離9kmの北に位置する佐土原城跡（宮崎市佐土原町）がある（第48図）。同城は伊東氏の全盛時代を築いた義祐の居城であり、島津氏時代には当主末弟家久の居城となった、南九州の歴史上に果たした役割の大きな山城である。地質的には宮崎城跡と同じく宮崎層群の岩盤が山体の主を占める丘陵に占地し（写真6）、この岩盤斜面の持つ防御力ゆえに重要拠点として存続し続けたものと考えられる。

つまり南九州においては山体斜面自体が高い防御力を持つことが、拠点城郭に求められた重要な構成要素だったと言える。先の節に見た縄張の機能分化と同様、宮崎城跡は典型的なシラスではない地質条件であるがゆえに、かえって南九州で重視された築城上の理念が尖鋭化して縄張に表れたものと



第48図 佐土原城跡縄張図
（佐土原町教委編 2005 より転載）

も理解できる。むしろこのようなイレギュラーな存在から見ることで、典型例からは見えにくい南九州の城郭が持つ特質をより浮き彫りにできるものと思われる。

（２）織豊期の宮崎城

織豊期という時期の実年代については、長く見積もれば永禄 11 年（1568）の足利義昭を奉じた織田信長の入京から、慶長 20 年（1615）の豊臣氏滅亡（大坂夏の陣。同年元和に改元し、一国一城令が布告）までとされている（高田 2017）。以下では、南九州の城郭に織豊系城郭の影響が見出される（城郭ごとに影響の有無、多寡の別はある）のは豊臣秀吉の九州平定以降と捉え、天正 15 年（1587）から慶長 20 年までの期間を織豊期、これ以前を戦国期と表現する。

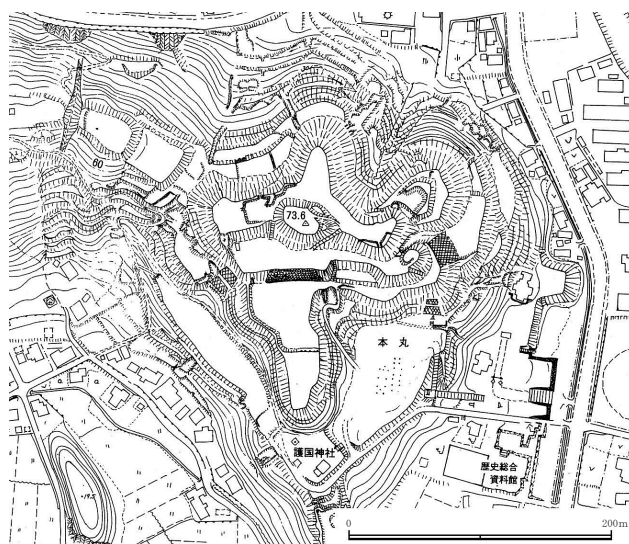
織豊期における宮崎城は延岡（縣）高橋氏の支城である。当時宮崎と呼ばれたこの地は、本拠延岡から間に複数の他領を挟んだ飛び地であったが、高橋氏領の総石高 5 万 3 千石のうち 2 万石を占める（宮崎県編 2000）重要な地であった。直線距離 70 km の南に位置するこの遠隔地の支配について、高橋氏は宮崎城を当該地唯一の支城としてこれにあたった。宮崎城は同時に、北の佐土原島津氏領、西の薩摩島津氏領、南の飫肥伊東氏領に対する境目の城という役割も担っていた。

当時の高橋氏は、北部九州で威を張った戦国大名秋月種実の次男元種を当主とする（一万田系高橋氏）。父とともに豊臣秀吉の九州征伐に抗戦したのち降伏し、天正 16 年（1588）、豊前国香春（福岡県）から日向国延岡（当時縣）に移封した。縄張研究において、戦国期の秋月氏は北部九州で多用された畝状空堀群を核として発展させた技巧的な縄張を創出し、勢力圏内（一門・同盟勢力）の拠点城郭で共有・展開させたと分析されている（木島・中西 1998、中西 2017）。高橋氏の福岡県香春城跡でも畝状空堀群に土塁が組み合わされ、秋月氏主導とされる縄張を持つ城郭群の一翼を担っている。

しかし、日向国移封後の秋月・高橋氏は畝状空堀群を使用した形跡がない（第 49 図）。秋月氏は種実の嫡男種長が当主として日向国高鍋（当時財部）に移封されるが、その本城高鍋城（宮崎県高鍋町）、支城櫛間城（宮崎県串間市）に畝状空堀群は用いられていない。同じく高橋氏も、移封直後の本城松尾城（宮崎県延岡市）では現在までのところ畝状空堀群が未確認であり、慶長 6 年（1601）から築城を開始した延岡城（同）も同様である。当然ながら、その支城宮崎城にも畝状空堀群は認められない。

八巻孝夫氏は、宮崎城跡に畝状空堀群が構築されていない理由について、当該期の倭城の様相をひき、この時期には既に畝状空堀群は使用されていなかったとする（八巻 2013）。あるいは宮崎城跡をはじめとする南九州の城郭が、先に見た山体斜面における高い防御力を本来的に兼ね備えていたため、あらためて斜面に畝状空堀群を構築する必要性を認めなかったのかもしれない。その場合、「大名系城郭」の検討事例として挙げられる特徴的な縄張を構築した戦国大名権力もこれに固執したわけではなく、地域性（この場合は地質）に応じて城郭を運用したと言える。城郭の改修についての中央政権による規制の存在も念頭に置くべきであるが、ともあれ戦国期の北部九州で特定のパーツに特徴付けられる城郭群を形成していた秋月・高橋氏が、織豊期に移封先の南九州においてどのような形態の城郭運用をおこなったのかという視点も、「大名系城郭」の議論を深める上で重要であろう。

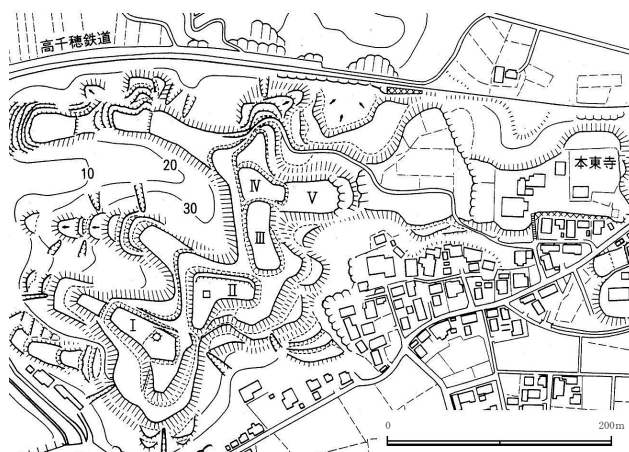
宮崎城跡では織豊期の城郭を特徴付ける要素のうち、石垣や天守相当施設は現在までのところ確認できず、一方で瓦葺建物は存在した可能性が高い。他地域の例として、豊臣政権下の蒲生氏領会津と、関ヶ原の合戦後の堀尾氏領出雲・隠岐では支城が天守級建物、石垣を備えながらも、瓦を持っていな



高鍋城跡（秋月氏本城）



楡間城跡（秋月氏支城）



松尾城跡（高橋氏本城）



塩見城跡（高橋氏支城）

第 49 図 日向国移封後の秋月・高橋氏の本城と支城

※高鍋城跡縄張図（宮崎県文化課編 1999）：八巻孝夫氏作成、楡間城跡縄張図（宮田・東 1994）：千田嘉博氏作成、
松尾城跡縄張図（宮崎県文化課編 1999）：甲斐典明氏作成、塩見城跡縄張図（宮崎県埋せ編 2012）

かったと分析されている（中井 2017）。宮崎城跡とは正反対の様相であるが、石垣は重量を持った建物を支えるとともに防御に有利なよう地形を改変できる構築物であり、天守はシンボルであると同時に、高所から攻め手を押さえ、文字通り最後の砦ともなりうる構造物である。つまり、会津と出雲・隠岐の支城は軍事に重きを置いたパーツの選択がなされ、宮崎城の場合はこれらとは反対に、織豊的要素の導入にあたって軍事に重きを置いていないと言える。

瓦は耐火性に優れた戦闘時の防御に有効な建築部材であるが、あくまで漆喰壁とそれらの重量を支える石垣の組み合わせによってこそ有事において実用的に機能するものであろう。蒲生領、堀尾領では、個々の大名の政策によって瓦の有無に本城と支城の格差を表出したとされる（中井前掲同）。これに沿えば、織豊期の城郭における瓦はすぐれた権威の表象ととらえられるし、耐用年数の長い瓦は永続的支配の象徴にもなりうるものであろう。その瓦のみを導入した宮崎城が織豊的要素に期待したのは、政治的シンボルとしての機能であったと理解できる。

支城における瓦葺建物の存在について、宮崎城と同じく瓦をとまなう慶長期福島領（広島県）の支城群では、瓦をのぞく遺物の出土が僅少であることから、支城は居住をとまなう日常的な存在ではなく、あくまで非常時のみに機能する軍事施設として整備されていたとの分析がなされている（高田 1995）。しかし宮崎城跡の場合は、今回発掘調査により慶長 5 年（1600）の落城戦以降に形成された可能性の考えられる面で献杯儀礼の痕跡が確認されており、城郭としての最終段階まで日常的に使用されていたと見られる。つまり織豊期における支城宮崎城は、有事のみに機能する軍事施設ではなく、日常的な地域支配の拠点として機能していたと考えられる。

戦国期末の島津氏に代わって宮崎を領有することとなった高橋氏は、宮崎城について地域支配の拠点という機能をそのままに踏襲した。そして新時代の支配者としての権威を高めるため、前時代には存在していなかった瓦葺建物という新種の建造物を山城の上に現出させた。その視覚的効果は極めて高かったものと思われる。

（３）関ヶ原の合戦と宮崎城

慶長 5 年（1600）9 月晦日の夜、延岡高橋氏の支城宮崎城に飢肥伊東氏が攻めかかった。これは 9 月 15 日の関ヶ原の合戦に連動したもので、西軍方についた高橋氏と、東軍方として活動することとした伊東氏による、日向国という地方での戦いであった。宮崎城は 10 月 1 日明け方に落城し、城代権藤種盛も戦死した。しかしこの時点で、美濃大垣城（岐阜県）にあった高橋家当主元種はすでに東軍方に寝返り許されていたため、宮崎城戦の実際は東軍陣営の同士討ちであった。悲劇的色彩の強いこの事件は、現在でも地域の人々が宮崎城跡にまつわり大切に語り伝えているエピソードである。

飢肥伊東氏の家譜『日向記』では、総数 3 千の伊東勢が夜陰に紛れて攻め寄せ、その先鋒のみが上げた声によって敵の実数を見誤った宮崎城側（史料により 3 百とも 6 百とも言う）が籠城という当初の方針を捨てたため、落城に至ったとされている。これに沿えば、宮崎城落城の原因は伊東氏側の戦術が優れていたためということになるが、あくまで二次史料の記述であり、イコール歴史事実ということではない。当時、実際の現場でもこのような戦術上の駆け引きがあったであろうことは想像に難くないが、現在の我々にそれを検証する術はない。ここでは城郭研究の視点で、当該期の宮崎城という存在そのものに、落城に至る根本的な原因が無かったかを考えてみたい。

先に述べたとおり、宮崎城は延岡高橋氏が飛び地宮崎に設置した唯一の支城であった。高橋氏領全体で見れば、本城から直線距離で 20 km の南に位置する日向市塩見城跡も、関ヶ原の合戦前後まで機能していた可能性が近年の発掘調査により示されているが（宮崎県埋せ編 2012）、宮崎平野に設置された支城は宮崎城のみである。この支城設置数の少なさは、戦国大名が中央政権の存在を背景として家中の支城主層を削減し、自らに権力を集中させて近世大名化するという全国的な動向に沿ったものである。つまり唯一の支城宮崎城という存在は、政治的には織豊期という時代の流れに則ったものと言える。これは宮崎城が、織豊的な要素のうち政治的なシンボルであることを期待した瓦葺建物のみを導入したという先の考察とも符合する。

その一方で、宮崎城は石垣や天守相当施設を導入しなかったため、軍事施設としては前時代の中世山城そのままの姿であったと言える。中世以来の山城合戦においては、攻城軍に城外から攻め掛かる籠城側援軍の存在がセオリーである。南九州においても、やや時代が遡るが 15 世紀の史料の分析か

ら、「後巻」と呼ばれる城方への援軍が籠城戦の勝敗を決したという図式が明らかとなっている（高橋 2015）。つまり軍事的に「中世山城」である宮崎城は、有事にあたっては援軍の存在を必須とした。しかし同時に、本拠から遠く離れた飛び地に唯一設置された支城であったため、周辺からの即時の援軍は望みようがないという矛盾した条件下にあったということになる。

以上を見ると織豊期における宮崎城は、城郭が持つ政治的な面と軍事的な面とがアンバランスな存在になってしまっていたと言える。前時代的な中世山城のまま、織豊的な支城体制の中で存続したことが有事における落城という結末を招いてしまったものかと考えられる。慶長 5 年の宮崎城落城は、中世から近世へと時代が大きく移り変わる過渡期ならではの出来事だったのではないだろうか。地方における城郭発展史上の歪みが出たとしても言うべき事象であり、我が国における城郭の変遷を検討する上でも注目すべき、重要な事例と言えよう。

【引用・参考文献】

- 木島孝之・中西義昌 1998 年「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」『戦国の城と城下町Ⅱ－鳥栖の町づくりと歴史・文化講座－』鳥栖市教育委員会
- 佐土原町教育委員会編 2005 年『佐土原町の中・近世城館』佐土原町教育委員会
- 千田嘉博 2000 年『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 千田嘉博 2004 年「戦国期の城下町構造と基層信仰 上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 112 集 国立歴史民俗博物館
- 千田嘉博 2009 年「宮崎城の構成」『宮崎城跡測量調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 75 集 宮崎市教育委員会
- 高田 徹 1995 年「慶長期における本城・支城構造－福島・毛利領を中心として－」『中世城郭研究』第 9 号 中世城郭研究会
- 高田 徹 2017 年「織豊系城郭とは何か」『織豊系城郭とは何か』サンライズ出版
- 高橋典幸 2015 年「南北朝・室町期南九州の城郭－『山田聖栄自記』より－」『城館と中世史料－機能論の探求－』高志書院
- 知覧町教育委員会編 2006 年『知覧城跡』（三）鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集 知覧町教育委員会
- 中井 均 2016 年『城館調査の手引き』山川出版社
- 中井 均 2017 年「支城」『織豊系城郭とは何か－その成果と課題－』サンライズ出版
- 中西義昌 2017 年「『大名系城郭』概念と織豊系城郭」『織豊系城郭とは何か－その成果と課題－』サンライズ出版
- 村田修三 1987 年「城の分布」『図説中世城郭事典』第 3 巻 株式会社新人物往来社
- 三木 靖 2005 年「薩摩国清色城の「縄張図」」『南九州城郭研究』第 3 号 南九州城郭談話会
- 南九州城郭談話会・北部九州中近世城郭研究会編 2013 年『九州における群郭式城郭の登場と展開』合同研究大会資料集
- 都城市史編さん委員会編 2006 年『都城市史』資料編 考古 都城市
- 宮崎県編 2000 年『宮崎県史』通史編 近世上 宮崎県
- 宮崎県文化課編 1999 年『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ 詳説編 宮崎県教育委員会
- 宮崎県埋蔵文化財センター編 2012 年『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 210 集 宮崎県埋蔵文化財センター

宮田浩二・東憲章 1994 年「宮崎県南部における中世城郭の一例」『宮崎考古』第 13 号 宮崎考古学会
八巻孝夫 2013 年「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第 27 号 中世城郭研究
吉本明弘 2018 年「南九州のシラス台地に築かれた謎の城郭群」『中世島津氏研究の最前線』洋泉社